

講座⑯大阪の語り芸

第1講義	上方落語の基礎知識と令和の若手事情
「落語」という芸能は、江戸期に上方で誕生し、今日まで発展してきました。本講義では、その歴史の簡単な解説を行うとともに、現代の若手落語家が、どのようにその歴史の一端を担っているのかについてご紹介いたします。お気軽にお付き合いください！	

第2講義	語り芸の時代背景-落語の場合-
伝統芸能としての「語り芸」には、その芸が生み出された時代の人々の教養や常識に基づく「当代性(時代性)」の情報と、その時代の人々が過去から受け継いできた「歴史性」の情報が内包されています。本講義では、古典落語の史層に沈んでいる「当代性」と「歴史性」を具体的に解き明かし、現代の私たちとは全く異なった、当時の人々の落語の楽しみ方を疑似体験して頂きます。	

第3講義	語り芸の伝承～稽古と修業 目に見えないカタチ～
日本の三大話芸（落語、講釈、浪曲）は明治期の口語体の速記術による三遊亭圓朝の『牡丹灯籠』からは文字情報、今や様々なメディアによって、実演そのままの映像などが普及している。それらを元に、上演する演目を個々に覚えて舞台（高座）にかける稽古方法が、プロの間でも増えてはいるが、昔ながらに師あるいは先輩からの「口承」する稽古方法も大切にされている。その理由などを、実演者でもある講師が、カタチの無い何を伝承し、次代へつなぐのかを説明する。	

第4講義	歌舞伎文楽と語り芸
古典芸能である落語や講談は、同時代の歌舞伎や文楽の影響を受け、また影響を与えている。しかしながら、町民目線で描かれることによって異なる景色が見えてくるものもある。1626年に芝居町となって以降、近松作品や三大名作を生み出した大坂・道頓堀は長く日本エンタメの中心であったため、道頓堀に因んだ落語も多い。そうした歌舞伎文楽と語り芸のつながりの世界を、学長とともに探検する。	

第5講義	此花千鳥亭が出来るまで
世界で唯一、講談中心の演芸場として2019年より運営される此花千鳥亭。個人で立ち上げ、DIYで完成し管理運営する軌跡や秘話を席亭である五代目旭堂小南陵がお伝えします。	

第6講義	現地講義：此花千鳥亭で講談を聴く
前週、個人で立ち上げ、プロの芸人自身で管理運営する此花千鳥亭の軌跡や秘話をお聞きいただいた事から、実際に現地に足をお運びいただき、ミニ寄席と会場見学を体験いただきます。	